

## 「知ったかぶり」と「知らないふり」

授業を進めていく際に、先生が子供たちに対して「全て私が知っている」という態度で接するのか、あるいは知っていても知らぬふりを決め込んで子供に尋ねてみようとするのかで、子供が学習に示す主体性が違ってくると思います。例えば、この時間で、ある知識を子供にしっかり教えたいと考えていたとします。いきなり先生が一方的に説明しだすのでは、子供は最初から受け身で学習に入ります。先生は当然教えたいことをもって授業に臨んでいるのですが、最初からそのことを詳しく説明することはせず、「～って知っていますか」と問いかけてみて、少しでも知識をもっている子供が見つければ、それに乗って「よく知っているね。それはどういうこと?」と、たとえ不完全であっても子供から引き出すことを心がけなければならないと思います。

「知ったかぶり」をして子供を遠ざけるのか、「知らないふり」をして子供を学習に惹きつけるのかは、教える側のテクニックの問題に留まらず、子供の学ぶ構えをつくる上でもとても重要なことです。授業の効率を考えれば、知らないふりをするよりは、教えたいことをどんどん教えていった方がよいに決まっています。でも、それでは子供が学びから逃げて行ってしまいますし、学ぶこと自体に楽しさを見いだせなくなります。しかし、いつも知らないふりをしていたのでは「先生は何も知らない」とばかりに軽くみられることにつながります。そのバランスに悩むところですが、一つの知識や技能を探るとき、まずは子供に出番を与えるというイメージをもっていることが必要だと思います。そこで壁に当たったり行き詰まったりしたときには、先生の出番となるわけです。もちろんそのようにことはうまく運びません。与えられることに慣れている子供たちは、知っていることがあっても最初から何も言わないでしょうし、先生がどのタイミングで正解（知識や技能）を与えたらよいか、それもよく分からないことがあります。しかし、こちらの基本的なスタンスとして「知らぬふりを決め込む」というのがいいような気がします。

さて、早いもので2学期も折り返しとなります。この時期は県内、市内の小学校で多くの授業研究会が行われています。そのような研修の場で多くを学び、子供を惹きつける授業、主体的に取り組める授業、自分を高める意欲のもてる学級づくり等を学び、大切な子供たちの有意義な学校生活に生かせるよう、教師一同取り組んでいきたいと思えます。

保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、いつもご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。今後ともよろしく申し上げます。（校長 村杉 一也）